



No. 6

ボストン研究留学

慶應義塾大学医学部循環器内科 助教

安西 淳

■はじめに

皆さん、はじめまして。私は2014年9月から2018年3月までの約3年半、米国マサチューセッツ州ボストンにある Filip Swirski ラボ (Center for Systems Biology, Massachusetts General Hospital (MGH), Harvard Medical School) に基礎研究で留学しておりました。今ではだいぶ昔のことのように感じますが、留学までの経緯からどのような研究生活であったかなどを記していきたいと思います。私の経験が少しでも皆さんの参考になれば幸いです。

■留学までの経緯

私は臨床現場ではなかなか知り得ない、なぜ? どうして? といった病態機序の解明に興味をもって、大学院で研究を始めました。そのなかで、心筋梗塞後に心機能悪化を促進する要因として免疫応答や炎症反応に着目し、骨髄から心臓に浸潤する免疫系の司令塔、樹状細胞について研究を行っておりました。研究を行うなかで過去に報告された論文を読むわけですが、自分の研究を進めるにあたり、とても参考にした論文が私の留学先となった Swirski ラボからのもので、留学するなら Swirski ラボを希望したいと自然に思っていた自分がいました。

留学したい、留学するならこのラボがよいと、何となくの希望はできても、通常はその後が問題となります。何とか先方とコネクションをつくらうとしてもなかなか

できませんし、メールを送っても返ってくる保証もありません。ただ、私の場合はとても運がよかったですのですが、たまたま2013年の国際心臓研究会 (ISHR) 日本部会の海外開催の主幹が私の所属する大学でした。数人の招待演者を選ぶ際に意見を求められ、Fil (Filip Swirski の愛称) をよんで欲しいと教授に頼み込みました。運よく向こうからOKの返事が来ましたので、自分からメールをして無理矢理コネクションをつくりました。留学を考えているのでポストドクとして研究をさせて欲しい旨を伝えたとところ、幸い Fil は私の博士論文を知っていてくれて、2013年の夏、ISHR の前にボストンに行って、自分の研究に関する short presentation を行い、面接を受けた後に、奨学金を取ってくれば受け入れてもよい、と返事をもらいました。このような形でコネクションをつくれたことは非常に運がよかったですし、そういった機会を与えてくれた上司に今でも深く感謝しております。

幸いなことに、最初にアプライした海外留学フェロシップを取得することができ、留学が正式に決まりました。実際の渡米まで1年弱ありましたので、その間はそのときに大学でやっていた研究を仕上げたり、英会話に通ったり、時間を有意義に過ごすよう努めました。

■ボストンでの研究生活

私がポストドクとしてラボに入った2014年9月は、以前のポストドクが自国に帰り、新しくポストドクとの入れ